

タケノコの肥培について

福岡県林業試験場造林科研究員

野 中 重 之

はじめに

農産物生産技術の進んだ今日、季節感を端的に表わすものとして、タケノコがあげられる。しかも、農薬を使用せず、そのうえ、タケノコの皮約60枚に被われているために、自然食品の代表とも言えるのではなからうか。

このためか、タケノコ消費が伸び、今日では、全国で約15万トンの生産がみられるに至っている。

タケノコ生産量を増大する要因としては、親竹の仕立方と肥培管理が重要である。「お茶とタケノコ生産量は、施肥量に正比例する」と言われ、タケノコ生産上、肥培は欠かせない条件である。

しかし、肥培効果をより高めるには、親竹の管理を充分に行なわなければならない。

そこで、今回は「タケノコの肥培について」という課題にはなっているが、肥培を中心に、親竹の管理まで含めた内容とした。

1. 親竹管理

モウソウチクは、発筍力を度外視すれば、14～15年位まで生存するが、タケノコ栽培という点からすれば、発筍力の旺盛な年令のものを仕立てなければならない。

発筍力の旺盛な年令は、2～6年生竹、特に3～4年生竹で、毎年コンスタントに生産をあげるには、1～6年生竹までの親竹が均等本数成立していることが必要である。

このためには、新竹を毎年所定の本数仕立て、一方5年目(或いは6年目)の親竹は、晩秋に伐採更新していくことになる。

また、10アール当りの仕立本数は地力、地形などにより異なるが、一般的には150～250本程度とする。これらをまとめると表1のようになる。

表一 新竹仕立と親竹伐竹^{10a}

親竹本数	新竹仕立本数		親竹伐竹本数		備 考
	5年生伐	6年生伐	5年生伐	6年生伐	
150本	30本	25本	30本	25本	伐竹年令を5年生竹の場合と6年生竹の場合とした
200	40	33	40	33	
250	50	42	50	42	

親竹の大きさは、タケノコの大きさに関係してくる。タケノコの価格は、时期的変動が大きいことは勿論であるが、大きさによっても価格差がみられる。大きいタケノコであれば、単位面積当りの生産重量は多いが、単価

或いは掘取り手間などの点で不利である。理想的なタケノコというのは、1kg前後のいわゆるS～M規格のもので、この大きさのものを多く生産するには、親竹の大きさを、目通り、直径で8～10cm程度のものにすべきである。

2. 肥培管理

タケノコは、親竹の仕立方を上手にすれば、無施肥でも250kg/10アールの生産量がみられる。しかし、この程度の生産量では、生産額は僅かで、経営的には成り立たない。竹林経営としては、1000kg以上の生産量を上げなければ妙味がない。

そのためには、肥培を取り入れた栽培法が望ましい。竹林肥培で考慮すべき点としては、成分要素、成分比、施肥量、施肥時期、肥料の種類などである。

(1) 成分要素および成分比

タケは、稲麦などと同じイネ科に属し、N・P・Kの3要素+Siを含めた4要素が必要である。これは、タケノコや皮、枝葉などに含まれる成分や、各種の肥培試験からも証明され、親竹の要求する主要成分の割合は、Nを10とすれば、Pが5、Kが6、Siが7と言われている。

(2) 施肥量

自然界には雨や落葉、土中などに含まれる天然の養分供給量もあるが、これだけでは、生産量の多くは望めない。増産をするには、増産分に要するだけの各種肥料成分を施さなければならない。

表一2は京都大学名誉教授上田博士が算出された、生産目標毎の施肥量基準である。この表は、砂質壤土や赤土など、タケノコ栽培に最も多く表われている土壌における基準量であって、火山灰土やシラス土壌などでは、P効果が低いので、30～50%位は多く施した方がよい。

また、放置していた竹林に、最初から1500～2000kg目標の施肥量ををするのではなく、段階的に生産量を伸ばし、最終的な目標を、表2に示すような施肥量とすべきである。

(3) 施肥時期

タケは、果樹や野菜などと違い、地下部に地下茎があり、この地下茎についている芽子が生長し、タケノコとなり、或いは親竹や地下茎になるなどの特徴がある。

表一 生産目標毎の各成分施用基準量 10a

生産目標	肥料成分			
	N	P	K	S ₂
1,000kg	20.3kg	9.0kg	12.8kg	15.8kg
1,500	33.8	15.0	21.3	26.3
2,000	47.3	21.0	29.8	36.8

地下茎の芽子が、タケノコとして発生するためには、夏期に親竹の同化作用が充分に行なわれ、また、地下部の細根が充分な動きを發揮してこそ、地下茎への養分供給がなされ、これをエネルギー源として、タケノコが発生する。

この親竹、地下茎、細根の充実を図ることが、親竹の管理であり、肥培管理でもある。

タケの地上部、地下部の1年間の動きは、図一に示すとおりで、この動きに合わせて、施肥時期を決定するが、年に3回位には、分与したいものである。

1回目は、発筈促進と生産増大を目的に1月下旬～2

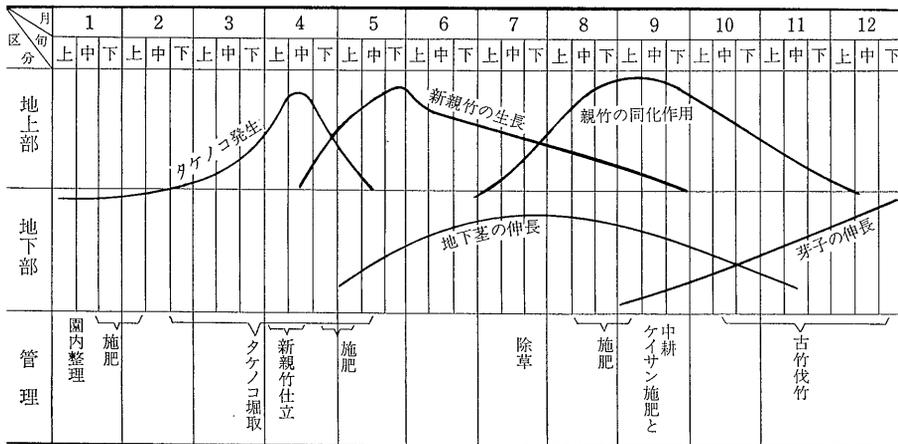
月上旬、2回目は、親竹の樹勢回復と新竹生長、及び地下茎伸長促進のため4月下旬～5月上旬、3回目は、芽子の増加充実と地下茎養分貯蔵のため、8月～9月に施肥を行なう。そのほか、夏期に化成肥料の前か後に、中耕を兼ねて肥料を施肥する。

(4) 肥料の種類

肥料の種類は、前記の成分バランスのとれたものであれば良いわけであるが、昨今のようにタケノコ栽培が盛んになってくると、1日でも早く出荷した方が、同じ生産量でも売り上げ額には大きな差が生じる。

そこで、発筈時期に最も関係し、更に5月まで肥効が欲しい1月施肥には、硝酸態チッソとアンモニア態チッソを含有した肥料が理想的である。その理由として、2～3月の低温期に速効的效果を表わすことによって、発筈を促進し、反面、発筈期間が2ヶ月にも及ぶタケノコには、持続的效果も必要であるからである。

図一 親竹・地下茎などの年間の動きと主な管理



以上、タケノコと肥培について述べたが、要は、親竹の管理を充分にやった上で、親竹の要求する成分を含んだ肥料を選定し、適期に施肥すること。同時に肥培効果をより高めるための、有機物保給—土壌改善を併行して行なうことが、増産、利益拡大につながるタケノコ栽培法と思われる。

謹賀新年

新春のご祝詞を申し上げ併せて皆様のご多幸をお祈り致します

昭和五十五年元旦

チッソ旭肥料株式会社

農業と科学研究会

まずは、新年おめでとうございます。あとがき 皆様のご多幸とご健康とご活躍をお祈り申し上げますとともに、本年もよろしくご鞭撻ご指導賜りますようお願い申し上げます。

内外の情勢はいよいよ厳しいものがありますが、特に農業情勢は予断を許さぬものがあります。今後どう展開して行くのか。いずれの方向を指向するにせよ、ここでは緊蹙一番する必要があるようです。どうか、ますますご活躍されますよう重ねてお祈り致します。(K生)